

2012.2.18

いま聴きたい旬の演奏家を集めて

プログラム

一般的に演奏家は多くの場合、歳を取りながら円熟して行く、と言われる風潮があるようです。「さすがベテランらしい深い味わい」と巨匠扱いする一方、「若さゆえまだ深みが足りない」とよく言われます。果たしてそうでしょうか。我々を感動させる演奏に若いか、巨匠とかは関係ありません。素晴らしい演奏がそこにあれば良いのではないのでしょうか。今日は、いま聴きたい旬の演奏家を集めてお聴きいただくことにしました。

榎本大進は1979年生まれ。17歳でロン＝ティボー国際コンクールに優勝。2010年に日本人としては2人目のベルリン・フィルのコンサートマスターに就任。心のもった暖かい音色で室内楽やソリストとしても大活躍のヴァイオリニストです。

ヤクブ・フルシャは1981年チェコ生まれの指揮者で、プラハ・フィルハーモニア、ボフスラフ・マルティヌー管弦楽団といった無名のオーケストラから、均整のとれた新鮮な響きを引き出す手腕はただ者ではありません。今最も目の離せない指揮者のひとりでしょう。1981年フランス生まれの**ゴージェ・カブソン**は久々に現われた大型のチェリストで、まだ荒削りなところもありますが、豊かな音色とスケール感は大きな魅力となっています。1969年フランス生まれの**エレヌ・グリモー**は若い頃からその名は知られていましたが、あまり特徴のない中庸のピアニストでした。しかしここ数年、音楽が躍動し、瑞々しい感性豊かな表現が聴けるようになりました。増々楽しみなピアニストのひとりです。

ネヴィル・マリナーはイギリス出身の今年88歳、現役最長老指揮者のひとりですが、室内オーケストラ出身の指揮者ということもあってか、それほどの高い評価を得てきたとは言えません。シュトゥットガルト放送響時代の録音があまり紹介されないこともあって良い演奏に触れる機会が少なかったことも原因の一つでしょう。しかし一昨年、昨年とN響を指揮した演奏を聴くとこの指揮者の実力が分かります。真摯な表現と無駄のない響き、気品とスケール感が加わって素晴らしい演奏を聴かせてくれました。いま一度の来日を願うばかりです。

アントニオ・ヴィヴァルディ (1678~1741):
ヴァイオリン協奏曲集“四季”(和声法とインヴェンションの試み) op.8
“春” / “夏” ~ 第3楽章 / “秋” ~ 第3楽章 / “冬”
榎本大進 (ヴァイオリン) / ベルリン・バロック・ゾリストン
(2011.10.20 サントリーホールでのLive)

ドミトリ・ショスタコーヴィチ (1906~1975):
交響曲第9番変ホ長調 op.70 ~ 第1楽章、第2楽章から、第4楽章、第5楽章
ヤクブ・フルシャ指揮プラハ・フィルハーモニア
(2009.4.27 ドヴォルザークホールでのLive)

*** 休憩 ***

ロベルト・シューマン (1810~1856):
幻想小曲集 op.73
ゴージェ・カブソン (チェロ) / マルタ・アルグリッチ (ピアノ)
(2011.7.26 サル・デ・コバンでのLive)

セルゲイ・ラフマニノフ (1873~1943):
練習曲集“音の絵” op.33 ~ 第2番ハ長調 / 第1番ハ短調
エレヌ・グリモー (ピアノ)
(2000. ベルリン・フィルハーモニー室内楽ホールでのLive)

ベラ・バルトーク (1881~1945):
ルーマニア民俗舞曲 ~
エレヌ・グリモー (ピアノ)
(2011.1.17 サントリーホールでのLive)

ヨハネス・ブラームス (1833~1897):
交響曲第1番ハ短調 op.68 ~ 第1楽章、第2楽章から、第4楽章
ネヴィル・マリナー指揮NHK交響楽団
(2010.9.15 サントリーホールでのLive)